

風の街の少女

松下達彦

初めて彼女を見たのは、風の街のベーカリー・カフェだった。ベトナム人の経営するカフェで働いているベトナム人の少女であることはすぐにわかった。

少女は小柄で黒い瞳が大きく、丸顔だったが少しえらが張っていた。後ろ髪を無造作にポニーテールのように縛り上げ、縛りきれなかった髪が細い首に少し残されていた。グリーンの生地に花模様のちりばめられた服を着ていたが、細い身体に黒地の地味なストレートのスラックスを履いていたせいか、頭がやや不釣り合いに大きく、細い首の上に載っているような感じがした。

ベーカリーの入り口のドアはいつも開いたままで、その日は天気がよかったためか、窓も全部開けたままだった。手元のノートパソコンに目を落としたその時、パンと手をたたく音がした。少女が鳩を追い払おうとしていた。1メートルほど飛び上がったまま出ていこうとしない鳩の前で、少女が手をはたいたのだった。彼女が鳩の目の前で伸びあがるようにして手をはたく様子がどことなくユーモラスだった。服の上の花模様が踊っているように見えた。無地の黒いスラックスは風の街では見ない生地とデザインだった。80年代の中国人の学生たちの服装に似ていると思った。風の街のブティックに並んでいるような服とは全く違っていた。きっとベトナムから持ってきた服に違いないと理解した。

やがて彼女はサンドイッチを作ったり、ケーキをショーケースに収めたりし始めた。彼女が働く様子を、コーヒーを飲みながらぼんやりと眺めているうちに、次第に彼女の手の動きの美しさに目を奪われていった。それは踊るようにしなやかでリズムカルな、それでいて無駄のない、きびきびとした動きだった。微笑みをたたえた表情の中に、生きることへの積極性を詰め込んだような緊張感があった。しばらくのあいだその華麗な手さばきを横目にとらえ続けた。

数日後、統計学の本を探しにキャンパスの中央図書館へ行き、3階から降りて、出口のあるカウンター近くまで来たとき、カウンターの向こう側のソファに、見たことのある女子学生が腰かけていることに気付いた。初めはそれが誰なのか思い出せなかった。しかし、彼女が大きな目を見開いて真剣に何かの本を覗き込んでいる様子を見て、それがベーカリーで見た少女であることに気づくまで、それほど時間はかからなかった。彼女はこの大学の学生であるに違いなかった。

そう思っているうちに、彼女はふと立ち上がって、本を片手にカウンターの脇の出口から足早に出て行った。